

たね通信

対象に祈るものではないでしょうか。他者の痛みを、まるで自分のことのように感じることや、愛する人の苦しみを、どうにかしてとり去ってほしいと願って祈ること。それは人が人としてある美しい姿であり、尊敬あ



`天窓、ができました！

友人、家族、恋人など、身近な存在の人だけのことでなく、祈りをもつて、人の痛みや苦しみに寄り添い、繋がって生きていく社会の土台を築いていくことが、未来へと向う私たちが為すべきことなのだと思います。

東日本大震災から4年、無情に時は過ぎていきます。現在でも仮設住宅での生活を余儀なくされている方たちや、原発事故後の福島で、まさに手の付けようのない状況の中、人生設計の全てを狂わされ翻弄されている方たちがいます。そして、何よりも犠牲となられた方々を偲び、そこかしこで多くの祈りがささげられていることではないでしょうか。私たちがまた、被災地の痛みを心に合わせていきたいと願っています。

人は自分の力ではどうすることもできない窮地立たされたとき、あるいは目の前の愛する人が重い病や痛みの中で苦しむ姿を見て、人間を超えた

人々との出会いがあるからこそ、そのような祈りを生み出すのだと思います。そしてその祈りは、空を切りはかなく消えていくようなものではなく、自分と他者の思いを繋ぎ、確かな関係性を築いていく力となっているのではないのでしょうか。時に私たちは、「祈るほか術がない」と、自らの弱さや無力感にさいなまれてしまいが、しかし、その祈りには、痛みや苦しみを誰も分かってくれないと孤独の淵に追いやられた、当事者を、そのままにしておくことをせず、痛む人の傍らに居続けることのできる、力となり、連帯して生きる、隣人への道を開くのだと思います。

祈り

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈)

たねスタッフのつぶやき

昨年4月から、朝の会(朝の集まり)を始めました。その日、小さなたねに來られる方たちの顔合わせです。

♪ととけつこうく夜が明けた
〇〇さん起きてきな(わらへ歌)

楽器や歌声で、たねの始まりを告げます。お互いの名前を呼んだり、呼ばれたり、顔を見て顔色を確かめ、一人ずつそれぞれを意識して「一緒に楽しく過ごそうね」といふ会です。季節を感じる歌や絵本、触れ合い遊び(顔に触れ、手を握り、揺れたり、さすったり)を、そこにいるみんな(スタッフも含め)で輪になってやっている、自然と笑顔になり、和やかな空気になってきます。それがだんだんと日常になりつつあることが、とてもうれしいです。(山口)

医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp

後記

中1で寝たきりの息子をバギーに乗せて歩いていると、「大変ねえ」とよく声をかけられる。私を思いやってくださる言葉と重々わかって心から感謝しつつも、子どもがどう感じるか複雑な気持ちになることもある。言葉を十分に理解できる子だと、気にして外出を嫌がったり、体重を増やさないよう食事をとらなくなることもあるとか。私もつい「大変ですね」と声をかけて後悔することがあって、どう言えばいいのか悩む。声はかけたし、かけてもらえるのは嬉しい。今は言葉を探し中です。(E)

特別から普遍へ

先日、特別支援学校高等部を卒業し福祉施設を新しく利用していくにあたって、ケアの手順や注意点などを記した「サポートブック」を、高等部の先生より頂きました。きめ細やかに、食事・排泄・姿勢・ケアの注意点等々が写真入りで作成され、これまでの学校生活において、先生方がいかに丁寧に対応されてきたことがよくわかるものでした。

以前（十数年前）は、学校での様子やケアの内容等を書面で欲しいと施設側が要求すると、「個人情報ですので、学校外への持ち出しはできません」などと断られ、支援学校で蓄積されてきた学習内容が、卒業に伴う「教育」から「福祉」への移行と共に分断されてしまう現実を非常に残念に感じていました。ところが、時代と共に特別支援教育のあり方も変わり、教育と福祉の連携が重視されるようになってきていると感じます。

情報の共有の部分では、「サポートブック」がとても重要な役割を果たします。これをもとにして障がいの特
性やケアの注意点、学校での取り組みを共有することが

できます。小・中・高と12年間を過ごした学校を卒業していく子どもたちにとって、そこに記された一つ一つの自らの生活をより豊かなものにしていくツールなのです。

肢体不自由の特別支援学校（小さなたね）を利用する大部分の方が関係しているには、知的障がいと身体障がいを併せ持つ、いわゆる「重症心身障がい」の子どもたちが所属しています。先生たちは学問を教える教育者であると同時に、子どもたちの身体のこと、排せつの仕方、医療的ケア等々を学んでいかなければなりません。それは教科書を開いて教壇から教えることに加えて、高い専門性が要求されていると思います。支援学校における「教育とは？」という根源的な部分をとらえ直し、まさに「人が生きるための教育」を子どもたちと共に体現しながら、実践していく姿がそこにあると私は思います。

私たちは重い障がいのある子どもたちを通して、ある人は親として、また介護従事者として、そして教育者として、医療従事者として、それぞれの立場から向かい合い、重い障がいをもつ彼（女）たちから「生きる」こと

本 の 紹 介

『わたし、前例、をつくります』 気管切開をした声楽家の挑戦』



青野 浩美 著
(クリエイツかもがわ, 1800円+税)

「気管切開をした声楽家」
これが彼女のプロフィール。
しかし、「障がい者が歌を歌う」
のではなく、あくまでも「プロの
声楽家」として生きようとし、前
例のない取り組みを自らで切り開
いてきた一人の生き方に、医療と
は、介護とは、新たな世界観を示
してくれる一冊です。

ご案内

「小さなたね」増改築に伴い、新規事業としての相談支援事業やコミュニティスペース、成人利用者の活動についてなどの説明・懇談会を予定しています。

日 時：4月9日（木）13時～14時

場 所：にのさかクリニック 2階ホール

お忙しい中とは思いますが、ご利用の皆様にはできるだけご参加をよろしくお願ひします。

何かやる
ってよ



ありがとうモビリオ

高橋 健一（介護職）

今年も桜の季節がやって来ましたね。ちょうど1年前、娘は他界しました。

先日、自家用車であった「HONDA モビリオ」を処分しました。

「モビリオ」は車種名であり、我が家では愛称でもありました。娘の通園・通学で10年間使った車です。後半はスクールバスに乗ることが難しくなり、毎日毎日モビリオに乗って大好きな学校へ通っていました。娘の笑い声も泣き声も染み込んだ車です。

車の処分に先立って、娘のカーシート（座れない娘のため、体に合せて作られたシート）を、きさく工房さん（福祉器具製作の会社）に引き取ってもらいました。妻とふたり、きさくさんの車を見送りました。

「お世話になりました」

この言葉で娘が笑っていたことを思い出します。

例えば、穴の開いた靴下を捨てるとき、「お世話になりました」と頭を下げると、ツボに入るらしく娘はいつも大笑いでした。きっと今回も、きさくさんを見送ったとき、モビリオを手放したとき、私たちの姿を見て天国の娘は「あはは」と笑ったことでしょう。

家には、娘が使っていた物たちがそのまま残っています。時間をかけて「お世話になりました」とペコリをしていくのだと思います。



を問われます。中でも「教育」は、それを言語化して学問としていく重要な役割を担っています。今後さらなる重症児教育の広がりや大いに期待しているところですよ。

特別支援教育は、個別性の高い子どもたちに対応するには十分な制度だと思えますが、一方で「特別」であるがゆえに閉ざされた環境になりやすいです。やがて子どもたちは一般社会へ出ていかなければなりません。ゆえに特別支援学校は、子どもたちがいかにその「普通」の中で生きていくことができるように、教育を提供し、社会にもまた働きかけていかなければならないと思えます。

今日の社会は貧富の格差がますます広がり、子どもたちを取り巻く環境も大きく変えています。親の経済力による「学習環境」の格差もまた、はっきりと浮かび上がってきています。同じような家庭環境の中で育った人たちと机を並べ、同じような学力の友達と過ごしていく。幼少期に多様な背景を持つ子どもたちと出会い、共に学ぶ機会が失なわれつつあると言えます。やがて他者と違うことを恐れ、次第に異質なものを排除していく環境や価値基準が生まれやすくなるのでは

なるのではないのでしょうか。

特別支援学校に通う子どもたちの存在もまた、「特別な子ども」ではなく、「支援を必要とする子ども」です。それをいかに社会の普遍性に浸透させていくのかは重要なテーマです。多様性を認め合う柔軟な社会は、まず多様な人たちと出会い、学び、共に成長していく中から形成されていくものです。「支援を必要とする子ども」であるからこそ、その存在から発せられる問いかけには力があります。好奇心旺盛で感受性豊かなときに出会い、交わり、互いに成長し合うことは、社会の多様性を学ぶのにこれほど良い機会はないと思えます。そのためにも「サポートブックの子ども向けバージョン」がつくられることで、互いの出会いの機会が増え、交わりが深まっていくことに繋がっていくのではないかと考えています。

一人の人がこの世に誕生し、世話を受けて成長して、また他の誰かの世話をします。やがて自らが誰かの世話を受けていく。そんな当たり前の人生サイクルが、歪められたり、排除されたりしないように教育を大切にしていかなければならないのではないのでしょうか。



それぞれの歩む道……



4月19日（日）

12:00~14:00

にのさかクリニック駐車場にて



今年も恒例の春のバザーの
季節がやってきました。
〰たねうどん、出店予定です。
食べに来てください！



何か始まる
ってよ

小さなたね増築工事が始まります

地域生活ケアセンター小さなたねは間もなく5年目に入ります。おかげさまで多くの方のご協力とご理解をいただき、利用される方々も、幼児から成人された方まで幅広い年齢層に広がっています。ただ、その一方で、施設が手狭になり、排せつ介助や入浴介助での十分なプライバシーの確保が困難となっております。

そこで、これまでの駐車スペースに別棟（2階建）を建設して、介助の場所を広げ、さらに、リフト浴ができる浴室や、コミュニティスペース（カフェ）も併設することにいたしました。

工期は3月末から7月上旬（予定）です。皆さまにはしばらくご不便やご迷惑をおかけいたしますが、どうぞご理解くださいますようお願いいたします。

また、駐車スペースとして、道路を挟んだ向い側の駐車場を確保しております。いったん施設内に入って利用者さんを降ろされた後、そちらに回ってご利用ください。



完成予想の模型

